



高田宏一周忌追悼公演

言葉の海へ

上演企画書

ココロノキンセンアワー

2016年8月

❖ 上演概要 ❖

① 東京公演

日時：2016年11月23日（水祝） 14：00～ 18：00～ ※2回公演
会場：求道会館

〒113-0033 東京都文京区本郷6丁目20-5

② 仙台公演

日時：2016年11月25日（金） 14：00～ 18：00～ ※2回公演
会場：エル・パーク仙台 スタジオホール

〒980-0811 宮城県仙台市 青葉区一番町4丁目11-1

出演：坪井 美香

茅根 利安

黒田 京子（ピアノ）

脚本：坪井 美香

演出：笠井 賢一

照明：小関英男（東京公演） 神崎祐輝（仙台公演）

宣伝デザイン：多田道子

ピアノ調律：辻秀夫（東京公演） 只野正昭（仙台公演）

助成：公益財団法人仙台市市民文化事業団 公益財団法人宮城県文化振興財団

協力：せんだい演劇工房10-BOX 下北沢アレイホール 舞台監督工房 すずしろ
苦楽堂

企画：ココロノキンセンアワー



2014年公演フライヤー

❖高田宏『言葉の海へ』について❖

一国の国語は、外に対しては、一民族たることを証し、内にしては、同胞一体なる公義感覚を固結せしむるものにて、即ち、国語の統一は、独立たる基礎にして、独立たる標識なり。（大槻文彦『広日本字典序論』より）

子を先立て、妻を失いながら、十七年を費やし、我が国初の国語辞書『言海』を完成させた大槻文彦の感動の物語——『言葉の海へ』。

原作者の高田宏さんが、2015年11月24日、亡くなられました。

これまで、数々の高田作品を上演してきている笠井賢一と坪井美香は、ココロノキンセンアワーとのタイアップで、伝記評伝の名手 高田宏の渾身の代表作で 大佛次郎賞・亀井勝一郎賞受賞の名作『言葉の海へ』の上演を重ねています。決して埋もれさせたくないこの原作。舞台化したいという私たちの申し出を、高田さんは非常に喜んでくださいました。作家の愛したこの作品を、一周忌の追悼の思いを込めて東京、そして仙台の皆様にご覧頂こうと思います。演じるのは蜷川スタジオ出身の坪井美香と、この公演にふさわしく仙台を本拠地とする茅根利安、音楽はピアニストの黒田京子です。ピアノという西洋を象徴する楽器の音とともに、大槻文彦と明治が夢幻のごとく立ち現れてくるのです。

いま何故この作品を上演するのでしょうか。

ナショナリズムはいつの時代にも、安易な排外主義や領土主義とともに喧伝されることが多いものです。今も中国、韓国、ロシアと領土、領海をめぐる問題は切実な課題です。大槻磐溪、文彦父子が生きた幕末も、国際情勢、西洋への正しい知識の欠如が、黒船の来航による混乱をもたらし、尊王攘夷思想を生みました。その点大槻家の学問には、祖父・玄沢の蘭学にしてすでに「藩」とか「幕府」を超え、近代化をとげた先進諸国のなかで、新しい国「日本」がいかにあるべきか、という視点がありました。

日本が西洋と出会った幕末から明治という時代に、和漢洋の学問を身につけ、広い視野に立ち、自国の独立の課題として、国語辞書の編纂を、命を削ってなしとげた文彦の苦闘と感動の物語は、現代に生きる私たちにも大きな指針を与えてくれるに違いありません。

文彦の時代から百年の時が過ぎ、いまや地球の存続そのものが危機的だといわれる時代、人災と自然災害が渾然一体となり、紛争が世界中にあふれかえっています。

幕末、西洋をよく知り、見識を持ち、近代化のもたらした弊害も見据え、自国中心主義に陥ることなく、地球規模の視点を持ち続けた大槻一族から、現代に生きる私達は多くを学ぶことができると思うのです。高田宏さんの作品とその生き方は私たちにそれを教えてくれます。

作家は、辞書作りを通して見えて来る「時代」を描きたかったと云っていました。幕末から維新にかけての仙台藩の苦闘と矜持を、北日本の地が生んだ逸材・大槻文彦の生き様を、ゆかりの地に今生きる人々に是非知っていただき、東日本大震災からの心の復興の一助となる事を願い上演いたします。

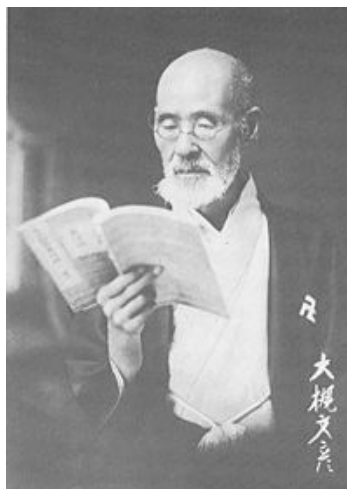
父（磐溪）と子（文彦）の、さらにその父祖の血の、切りようのないつながりのなかで、『言海』は生れた。大槻一族というパターナリズム（家父長主義）と、奥羽というリージョナリズム（地方主義）、日本というナショナリズムが、洋学という西欧合理主義に補強されながら、ひとつになっていた。

『言葉の海へ——第四章 戊辰の父と子』より

敷島ややまと言葉の海にして拾ひし玉はみがかれにけり 後京極

『言海』の終頁にかかげた歌である。書名の因るところであり、文彦の自負でもある。

『言葉の海へ 序章』より



大槻 文彦 おおつき ふみひこ

(1847年12月22日 - 1928年2月17日)

日本の国語学者。明六社会員。帝国学士院会員。儒学者・大槻磐溪の三男として江戸に生まれる。兄に漢学者の大槻如電、祖父に蘭学者の大槻玄沢がいる。

日本初の近代的国語辞典『言海』の編纂者で、宮城師範学校（現・宮城教育大学）校長、宮城県尋常中学校（現・宮城県仙台第一高等学校）校長、国語調査委員会主査委員などを歴任。

開成所、仙台藩校養賢堂で英学や数学、蘭学を修めたのち、大学南校を経て、1872年に文部省に入省。1875年に、当時の文部省報告課長・西村茂樹から国語辞書の編纂を命じられ、1886年に『言海』を成立、その後校正を加えつつ、1889年5月15日から1891年4月22日にかけて自費刊行した。その後、増補改訂版である『大言海』の執筆に移るが、完成を見ぬまま、1928年2月17日に自宅で死去。

◆ 上演記録 ◆

2013年

8月 東京公演（於・下北沢アレイホール）

9月 仙台公演（於：能-BOX）

2014年

8月 石巻公演（於：宮城県 N' s-SQUARE）

一関図書館開館記念公演（於：岩手県 一関文化センター）

9月 寒河江市公演（於：山形県 寒河江市文化センター）



能-BOX での舞台

❖プロフィール❖



坪井 美香 つぼい みか

俳優

蜷川スタジオを経てフリー。プロデュース公演で活躍。また関弘子に師事して「語り」を学び、レパートリーは古典から現代小説まで幅広い。音楽、舞踊などとのコラボレーション多数。最新作は折口信夫原作「死者の書」（鐵仙会能楽研究所）。2011年に高田宏の著作を語るシリーズを開始、『雪恋』『雪古九谷』（石川県九谷焼美術館）『島焼け』（親鸞上人750回忌記念公演／築地本願寺本堂）など全作品に出演。





茅根 利安 ちのね としやす

俳優 ココロノキンセンアワー主宰

仙台市を拠点に40年間演劇活動を展開。パルテノン多摩小劇場フェスティバル優勝、下北沢演劇祭、愛知県芸術劇場フェスティバル招聘などを経験。1999年宮城県芸術選奨新人賞受賞。2011年東日本大震災からの心の復興を目指し「ココロノキンセンアワー」をプロデュース。被災地支援公演や東京、ソウル公演を行う。また、『奥州おもてなし集団 伊達武将隊』『二本松少年隊』の演出も手掛ける。



「ノスタルギガンテス2」 (2015)



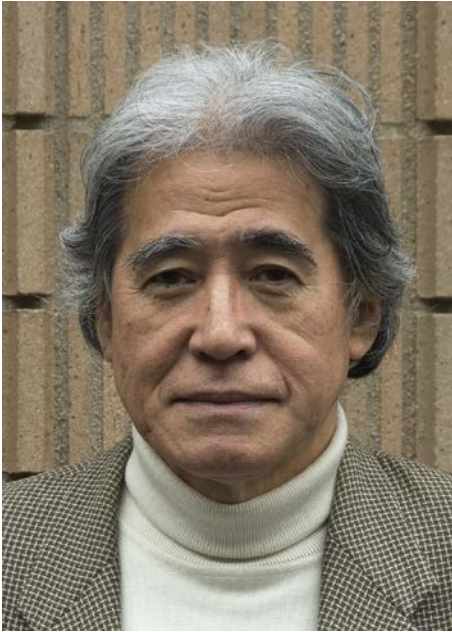
黒田 京子 くろだ きょうこ

音楽家

'80年代後半、自ら主宰した「オルト」では、ジャズだけでなく、演劇やエレクトロニクスの音楽家たちと脱ジャンルの場作りを行う。'90年以降、坂田明(as)などのバンドメンバーや、演劇や朗読、無声映画の音楽などを長期に渡って務める。'04年から6年間余り、太田恵資(vn)と翠川敬基(vc)のピアノ・トリオで活動。'10年から喜多直毅(vn)と言葉と音楽の実験劇場「軋む音」を不定期に展開。'13年、ピアノ・ソロCD『沈黙の声』、'14年、喜多直毅とのデュオCD『愛の讃歌』を発表。



喜多直毅とのデュオ (2016. 7. 30)



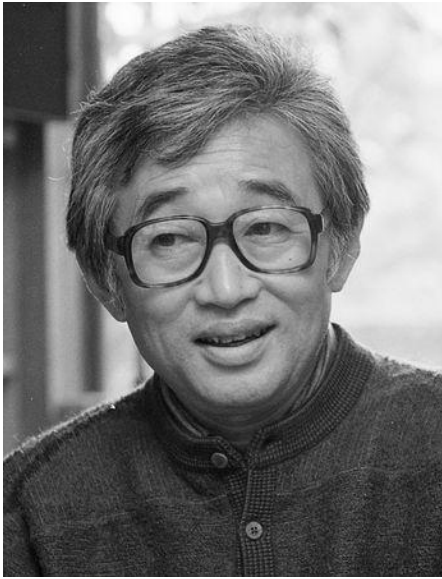
笠井 賢一 かさい けんいち

演出家・能楽プロデューサー

1949年生まれ。今尾哲也氏（歌舞伎研究家）に師事。八世坂東三津五郎秘書として著作の助手を努める。古典と現代を繋ぐ演劇活動を能狂言役者や現代劇の俳優と展開。「古事記」から「源氏物語」「平家物語」、近松門左衛門、宮澤賢治、新作能まで幅広く演出。2015年には新作能『冥府行～ネキア』の脚本を手掛け、ギリシャと日本で上演。作家・高田宏著作を語るシリーズを全て演出、語りと音楽の有機的な関係の創出を目指す。アトリエ花習代表。



新作能『冥府行～ネキア』ギリシャ公演（2015）



高田 宏 たかだ ひろし

作家

1932年京都生まれ、石川県育ち。京都大学（仏文）卒。光文社、アジア経済研究所、エッソ石油で諸雑誌を編集、84年よりフリー。78年、『言葉の海へ』で大佛次郎賞と亀井勝一郎賞を、90年、『木に会う』で読売文学賞を受賞。他に、雪国文化賞、旅の文化賞など。著書、『雪古九谷』『われ山に帰る』『島焼け』『子供誌』ほか約百冊。元石川県九谷焼美術館館長、元深田久弥 山の文化館館長。2015年11月24日、永眠。

◆高田宏一周忌追悼公演「言葉の海へ」お問い合わせ先◆

ココロノキンセンアワー

〒983-0021 宮城県仙台市宮城野区田子3-6-16

電話：080-1656-0003（茅根利安）

Mail:chinone_toshiyasu_office@yahoo.co.jp